

●教育人物記②

内村鑑三——キリスト者と水産学

宇田道隆

(東海大学海洋学部委嘱教授・水産海苔)

水産学者を志す青年内村

大正の末年東大物理学生だった筆者は級友菅井準一君に誘われて柏木の聖書研究会に参上し、内村鑑三先生のお話をうかがったことがある。精神的よりどころを求めていながら勉強不足と勇氣に欠けていたため、せっかくの機縁を活かせず、それきりだった。大学を出て農林省水産講習所・水産試験場に奉職し、たまたま「明治大正水産回顧録」(下啓介著、昭和七年)を開いて、内村先生が水産伝習所(大日本水産会所属、後の官立水産講習所、東京水産大学の前身)で明治二十二年三月から一カ年水産動物学を教授されたことを知り驚いた。第一回卒業式記念写真(明治二十三年二月二十二日)には先生の御顔が見える。筆者には内村先生がなぜ水産に志し、それをすててキリスト教一遍倒になったかが久しい疑問であった。

内村鑑三先生が天然学に心を寄せたのは、十二、三歳ごろ、夏、故郷の上州高崎付近の川魚をヤナ、スク手、ツリバリなど手製の漁具でとり、アユ、ハヤ、ウナギ、ナマズなど水族の習性を観察して天然の物への愛を覚えたのが始まりである。やがて、明治十年東京英語学校へやって来た開拓使出仕の官費生募集演説にひきつけられ、北海の風物に憧れて札幌農学校に入り、動物学に心を傾けるようになった。内村ら第二期生は熱狂的な第一期生の「イエスを信ずる者の契約」に署名を強要せられ、級友の続々陥落の最後に三カ月頑強な抵抗のち内村も署名し、翌年六月二日十八歳で洗礼を受けた。開校当時教頭だったウイリアム・S・クラーク農学博士(マサチューセッツ州立農科大学校長)は内村らの入学の前に「諸君、大志を抱きたまえ!」の一語を馬上から第一期生に残して帰国した。しかし彼の伝道がみのって内村たちを改宗さ

せ、神を信仰し、聖書に生きつつ科学を愛し、真理探究の喜びにひたることを得しめた。内村鑑三先生は東京英語学校

どうだろうと自問自答し、早くも後年の方向を示唆している。アワビの生殖実験でも非常な感銘を与えられた。



せ、神を信仰し、聖書に生きつつ科学を愛し、真理探究の喜びにひたることを得しめた。内村鑑三先生は東京英語学校（東大の前身）へ父の希望に副って法律を修めるため入学したが、法律には向かぬと知って札幌農学校に転じ、初め地理学者にと考えていた。少年時代から歴史と地理に特別な興味を持っていたからであった。しかし北海道の大自然に接してから、漁猟資源の開発を目的とする実用的な魚、鳥、獣などの動物学に専念しようと決心した。

北海道東岸で鮭漁や豊富な海産生物、西岸で鱒漁を視察して大変興味を持ち、「我ハ北海道ノ漁夫トナルカ、ガリラヤノ漁夫トナルカ、ソノイヅレナルカ言フコト能ハズ」とのべており、海の上の漁猟はうまく行っているが、人間の漁りは

が見える。筆者には内村先生がなぜ水産に志し、それをすててキリスト教一遍倒になつたかが久しい疑問であった。

君、大志を抱きたまえ！」の一語を馬上から第一期生に残して帰国した。しかし彼の伝道がみのつて内村たちを改宗さ

どうだろうと自問自答し、早くも後年の方向を示唆している。アワビの生殖実験でも非常な感銘を与えられた。

明治十四年七月九日札幌農学校第二期生卒業式の日、首席の内村は、「大洋の農耕、漁業も亦學術の一なり」と題して演説し、「漁業に対する水産学は農業に対する農学の如く一つの科学として発達せねばならぬ。日本のように水産物に富んだ国ではその研究をゆるがせにすべきではない」と力説した。「日本のような島国では国を富まし、民衆を益するため水産を盛んにして富の過半を水から得ねばならない」と考えて、「よし、自分は日本一の水産学者になつてやろう」と決心を固めたのであった。今から百年近い昔の先覚として二百海里時代の今日驚歎すべきものがある。

『卒業演説の後、内村は学生に向かい、「今私たちは本校を卒業しましたが、決して無事泰平を享樂するつもりはありません。真理のために働こうとすれば必ず艱難かんなんが私たちを待っているでしょう。この卒業式はその苦しい道、真理のためにたたかう道への入口です。在校生諸君！どうか私たちの志をついで下さい。安樂なたやすい生活に満足せず、私たちのあとを継いで真理のためにはいつでも命を捨てる困難な道に進んでください」とその言葉が終ると、一同水を打ったようになり、静かな啜り泣きの声だけが聞えた。皆は拍手するの忘れた。』当時一年生だった志賀重昂（『日本風景論』等を著わした有名な地理学者）が日記にそう書き残した。大説教

家の卵二十歳の熱弁であった。

自然科学と信仰

卒業後直ぐ開拓使勸業課漁獵科に奉職し、水産調査に従事した。明治十五年十月提出の札幌県アワビ蕃殖調査書は大変な労作で、アワビの成熟時を確認するようになるまでの努力と、その発見の感激は、「……アワビの卵子を初めて顕微鏡の下で発見した時の如き、余は歓懐おく能わず、感涙滂沱として下り……」と記した。そして赤岩山頂に登り、はるか日本海を望見して神に感謝の祈りをささげている。

日本で最初の水産調査報告はこの人の主張で生れ、わが国の水産業に関する科学的研究はこの調査書に始まったと藤田経信理学博士（水産教育と北海道、北海之水産一〇八号、昭和十三年十一月号）がのべた。

この記念すべきアワビの大小の殻の標本は今日でも北大博物館に陳列されている。

この調査復命書には潜水器使用見込上申書がついていて、その中に聖使徒パウロの言葉を引用したのも公文書に有史以来とされ、当時の内村鑑三は科学と宗教とに同時に生きていたことを証明している。

元来内村らの農学校寄宿舎の一室での集まりは聖書研究会的な日曜朝の礼拝と夜の祈り合いの会合を含む芽ばえの教会（エクレシア）であったが、明治十五年教派から独立した合同

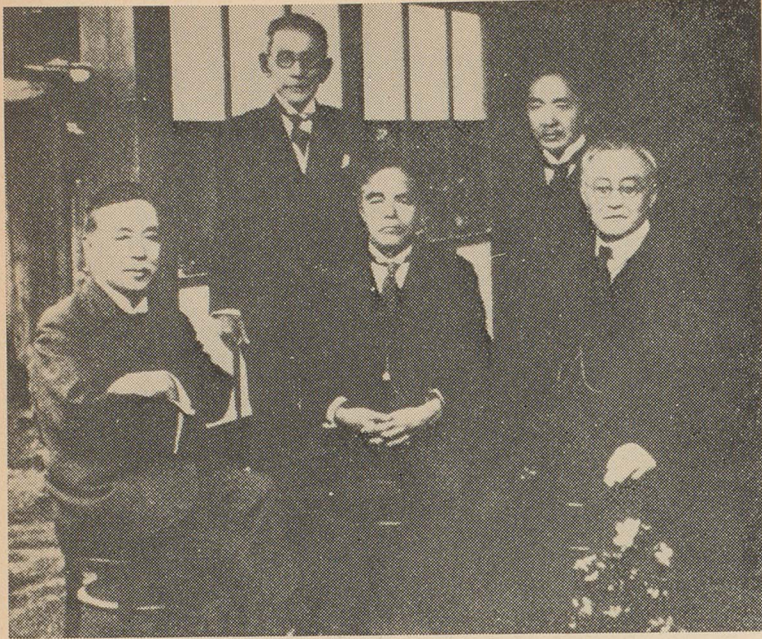
の一期、二期を中核とする「札幌教会」（後の「札幌キリスト教独立教会」）を造り上げた。札幌YMCAも造った。内村開拓使御用掛は一期生の同役伊藤一隆（明治十九年北海道庁技師として渡米、鮭鱒の人工孵化法を導入、千歳孵化場を起した）と水産調査出張の間にもキリスト教を伝導、禁酒宣伝をやった。「札幌教会」献堂式に内村は「帆立貝とキリスト教の關係について」講演した。

原始教会といつても「イエス・キリストと十字架」の福音を信じて伝道にいそしむ美しい平和な家庭的教会で、「靈魂の救い」の力はまだ欠けていたと内村は告白している。チャールス・ダーウィン（一八〇九—一八八二）は「種の起源」（一八五九）に「進化論」を説いて宗教界に大波紋を起したが、内村は進化論を真理としてこれの忠信な学徒であることがキリスト聖書に忠実な僕であると確信していた。

明治十五年内村は上京した。大日本水産会（幹事長品川弥二郎）はこの年二月創立されたが、発起人二十四氏の中に内村鑑三の名があるのは驚きである。内村は同会でたびたび「人氣ある講演者」として講演し、寄稿が同会会報に載っている。明治十六年二月号に、「漁業と気象学の關係」には漁船の海難防止と漁業の科学的開発を説き、同十七年七月号に「漁業と鉄道の關係」を記述し、水産物の流通配給問題をとりに上げ、同年十月号には「鱒の発生」を、同年六月十二月号に「ニンシンの調査成績」と続々学術的報文を掲げ、特

に後者はノルウェーのザースとドイツのタップアーのニンシン発生研究を日本の学界に紹介した重要文献とされ、大日本水

農学士内村鑑三は明治十六年東京で開かれた第三回キリスト信徒大親睦会に札幌教会を代表して出席し、「空の鳥と野



1928年（昭和3年）6月，広井勇，伊藤一隆，内村鑑三，大島正健，新渡部稲造（左から）

に後者はノルウェーのザースとドイツのタップアーのニシン発生研究を日本の学界に紹介した重要文献とされ、大日本水産会報は内村の投稿でその存在価値を高めた。

的な日曜朝の礼拝と夜の祈り合いの会合を含む芽ばえの教会（エクレシア）であったが、明治十五年教派から独立した合同

農学士内村鑑三は明治十六年東京で開かれた第三回キリスト信徒大親睦会に札幌教会を代表して出席し、「空の鳥と野の百合花」と題して講演し、キリスト教界で一べんに有名になった。その講演の目的は神の造化（大自然）のたくみを研究する適当な方法を示すことであつた。「造化ヲ観テ造化ニ止マラズ当ニ造化ノ神ヲ見ルニ至ル」というのが内村の信仰であつた。造化を学ぶのには科学的方法（顕微鏡や望遠鏡を用い、重力、化学物質など美学的に研究して学びとる）と、信仰による方法とあるが、前者が後者を深め、確かにするもので、ネイチャー自然を科学的に観察し、その構造を究明することで造物主（神）の知恵の深さに驚き、讚美し、遂に信仰を通じて万物が造り主神の愛を現わすことを知るといふのである。すなわち、前記の二つの方法は内村にあっては一つだった。信仰に基いて大自然を観、科学的に究明するとき、神の存在を確証できることを内村鑑三が喝破したのである。彼は大正十二年に「天然は第二の聖書である。」ネイチャーと切り切っている。そして、宗教は科学を霊界に移したようなもので、アロビヤニン、サケを究めたと同じ精神と方法で聖書を究めるのだとも言っている。内村鑑三は水産学から進化したキリスト教の宗教宇宙観に入ったのだ。自然探究者の筆者は深く是れに共鳴する。

水産学を捨てて米国へ留学

明治十六年（二十三歳）に開拓使御用掛を辞職し、津田仙経

り上げ、同年十月号には「鱈の発生」を、同年六月十二月号に「ニシンに関する調査成績」と続々学術的報文を掲げ、特

營の学農社講師になり、十一月農商務省囑託として水産課に勤務、日本産魚類目録を編集して五九九種を記載した。シールト以来の業績である。

さきにニシン漁業調査成果をまとめ、博引弘証、理路整然として、当時の学界をその完璧な学殖の深さで驚かせた内村は、それでも「自分は宗教界に何もしておらぬ」としていた。明治十六年八月二十一日付の無二の親友宮部金吾（のちに北大教授、植物学の権威文化勳章を受く）宛の手紙に、「我ハ生物学ヲ取ルベキカ?……漁業?……伝道?……」と将来に迷っており、結局「働きて待つことを学ぶ」と漁業と生物学を勉強することにきめた。

しかし、真理の探究に没頭するには「我ハ如何ニシテ神ト人類ノタメニ最モ役立チ得ルカ」といった内省があまり強過ぎた。漁業開発の研究は非常に面白いが、「社会に奉仕セントスル我ガ生涯ノ目的ナリヤ」と疑い、自分の貧弱な肉体的健康では海上の作業に自信がもてず、「実ハ、我ハ靈魂ノコトニ興味ヲ有ス。我ハ能フ限りノ手段ヲ以テ靈魂ヲ光明ニモタラサント試ムベシ」と本音を吐いた。

明治十六年秋から結婚問題で悩んでいたが、親友宮部に出示した手紙に、「我ハ目下水産慣行調、主トシテソノ博物学的部門ヲ託サン居レリ。……ドクトル・チェンバーレンノ『日英辞典』に挿入セラルル日本魚類目録ヲモ調製シ居レリ……漁業ニ関スル七〇頁ノ書物モ書ケリ」とある。ゴタゴタの

末、婚約決定を知らせた明治十七年二月十八日の手紙に、「僕の方は非常に楽しく時を過している。午前九時に農商務省へ出勤し、十二時までいて、主として外国の漁業を研究する。これから東京大学の医学部へ行き松原新之助（後に初代農林省水産講習所長となる）と魚類を研究する。目下板鰓類を研究している。ちょうど今日一新種の魚を発見したが、多分新しい種族を構成するものに相違ない。……魚類と漁業とが僕の時間を大部分占領している。身体は今非常に魚臭い。」と研究に弾む思いを語っている。

同年三月二十八日結婚した内村は五月、北海道のニシンの卵を佐渡島付近に移植する官用で出張旅行した。同年九月十五日発信では「東大動物学教室で魚類の研究を楽しんでいる。日本産脊椎動物目録の作製に手をつけている。……僕自身は太平洋全域にのびひろがっている。すなわち身は日本に、志は（アメリカ）に。……」としきりに他の友人たちの外遊に刺激せられているようすがわかれる。「ああすべてのは自分はとり明らかにした。僕は神の大神の御手の下にへりくだって、耐えしのぶ。……ただキリストの中にいます神だけが、悩みの時の僕のかくれ場である。……」と心中の苦悩を伝えていたが、同年十月二十七日宮部金吾宛の書信は遂に破婚を報ずるものであった。信頼した者に裏切られた悲痛は内村鑑三のような潔癖で正義心の強い激情家には常人の想像以上のものであった。離婚の打撃を免れるため両親

りした。明治十八年七月末エルウィンを去ってマサチューセツ州グロースター漁港で過労の身体を休息させてアメリカ漁業の実地を視察し、タラ、サバ、カジキマグロの利用実地、

英辞典」に挿入セラルル日本魚類目録ヲモ調製シ居レリ……
漁業ニ関スル七〇頁ノ書物モ書ケリ」とある。ゴタゴタの

た悲痛は内村鑑三のような潔癖で正義心の強い激情家には常人の想像以上のものであった。離婚の打撃を免れるため両親



農商務省水産課勤務時代の内村

友人の忠告に従い米国に留学して傷心を癒すことになり、十一月六日横浜を出帆した。

かねて実業界、漁業者、官界に失望していた彼は辞表提出とともに、心の中で天職としていた水産学を捨てようとしていた。

破婚が内村の背負う十字架となったと同時に、自らの靈魂の救いという大問題にかけて、慈善事業を学ぶためペンシルバニア州エルウィンの白痴院に入ったが、遂にそれも思うに任せなかつた。しかしこの間でも全く水産学を忘れたわけではなく、農務省水産調査所を訪ね、スミソニアン院長ベヤード氏と日本漁業を語ったり、水産調査船アルバトロス号を參觀して驚嘆し、タンナー船長と語り、博物館で水産を調べた

りした。明治十八年七月末エルウィンを去ってマサチューセツツ州グロースター漁港で過労の身体を休息させてアメリカ漁業の実地を視察し、タラ、サバ、カジキマグロの利用保蔵、魚膠製造、漁船構造などを学んだ。この地で心中煩悶の末に天と靈について学び、「人の義とせらるるは信仰に由り、律法の行に由らず」と悟った。

キリスト者としての晩年

九月アマスト大学に総理J・シーリー博士を訪ね、入学した。この時以来内村の人生観は一変した。「バチユラー・オブ・サイエンス」となって帰国したのは明治二十一年五月十六日、二十八歳の時である。シーリー師から信仰とそれに伴う学問を学び、落ち着きを得た。「私の靈魂の父」と呼んだシーリー師は言った。「君は何故十字架の上に君の罪をあがないたまうたイエスを仰ぎ見ないのか。何故に君の成長を神と陽光とにゆだね奉り、安心してそれを待たないのか」と。

鑑三の靈の目は覚めた。信仰の何たるかを初めて悟ったのである。イエスと日本、二つのJのため、彼は新しい希望に燃えつつ帰国した。同年秋十一月北越学園に赴任し、日本キリスト教教育の理想をも実現しようとしたが、宣教師団と忽ち衝突し、三ヵ月で東京へもどった。この年の春に佐渡でニシンが漁れたが、四年半前に自分が北海道から佐渡へ移植したニシン卵が孵化して成魚になったものと感慨を深うし、「日

本海魚類ハ科学的ニ研究セラレタルコトナク、小生ハソノ最初ノ魚類学者タルノ機会ヲ有セシナリ。シカシ現在ハ『人間ノ魚』ガ我ガ注意ヲ余リニ多ク引キ居リ……」と記している。

明治二十二年一月三十日大日本水産会で水産業者育成のため開設せられた東京の水産伝習所へ農学士米国理学士内村鑑三は動植物学教授を委嘱(大日本水産会報第八五号)されて一週四時間、つつ実用動物学を三月十六日から講義し、翌年二月まで続けた。そしてこの間に水産局へ一週二回行って日本魚類を命名記載し目録を作る以前からの仕事に当った。二十二年八月二十日よき忠実な妻横浜加寿子と結婚した。

明治二十三年九月、第一高等中学校嘱託講師となり、天下の秀才を集めた一高で万国史を講義するようになった。だが彼は、「自分ハ決シテ最後ニ歴史家又ハ天然学者ニナラヌト思フ。ローマ帝国又ハ魚類以上ノ大問題ガ我ガ注意ヲ引ク……」と断言している。

在任四カ月で明治二十四年一月九日、一高講堂の教育勅語奉戴式場で内村は勅語の震署に敬礼しなかつたことで「不敬事件」を起した。彼は病み、妻もまた病み、四月十九日亡くなった。心労で不眠症に悩む内村を札幌の宮部金吾、新渡部稲造、広井勇の三級友が招いて暖く慰めた。明治二十五年大阪泰西学館へ赴任、岡田静子と結婚、同二十六年熊本の英学校に赴任、間もなく京都に移り、同二十九年名古屋英学校へ

同三十年万朝報(東京)へ、同三十一年退社し「東京独立雑誌」創刊と転々するうちに、完全な宗教家になり、水産学の影は全く消滅した。

大正元年(五十二歳)に愛児ルツ子を亡くして「復活」の信仰を堅め、もはや何者になろうとも願わぬ、「唯一書」^{バイブル}聖書の人となつて、人を漁り、人を牧する理想を実現する日々を送った。東大総長となつた矢内原忠雄、南原繁、東海大総長松前重義など数知れない青年たちがその中であつた。

内村鑑三先生は天才で、常軌をもつて律し得ざる強烈な個性から発する言動のため多くの弟子の離反、弟子追放を重ねたが、それらの人々は又ひきよせられ、追慕した。

筆者はとるに足らざる一学徒であるが、やはり先生の魅力の放射を魂の底に受けていたものと見え、結局は数十年後の現在先生の漁りの網に入っている小魚のわが身を発見する。

「地人論」(明治二十七年)の、「海よ、海よ、我を寛くせよ……。海よ、海よ、我を清くせよ……。海よ、海よ、我を強くせよ……。」は又筆者のねがいでもある。「余は人に嫌はれしが故に神にまで追ひやられたのである……而して余は人に嫌はれて初めて神の慈悲なるもの何たるかを知つた」(大正十年、六十一歳)。

先生の墓碑の銘「吾は日本のために、日本は世界のために、世界はキリストのために、そしてすべては神のために」を結びとしよう。